

お話のパンケーキ

加藤雅子（大阪府枚方市 五十八歳）

台所でフライパンを火にかけ、バターを熱していると、ふいに浮かんでくる顔がある。

もう半世紀以上も前のことである。当時、私は小学二年生で、川辺の工業地域にある住宅密集地の長屋に住んでいた。両親とも働いていたので、私は、「鍵っ子」だった。

隣の森下さん宅には、十八歳の一人娘のあきさんがいた。尖った顎の優しい目をした人で、病気のためたまに入院することがある。私はあきさんを姉のように慕っていた。

学校から帰って、ひとりの自分を持って余したとき、私はよく森下さん宅の玄関の戸を叩いた。大抵、あき子さん一人が家にいて、快く招き入れてくれた。六畳と四畳半に小さな台所の間取りはうちと同じなのに、あきさんたちはまるで別世界だった。畳の部屋にぶ厚い絨毯が敷かれ、洋風の家具は真っ白である。箆筒の

その本を返しに行った日、あきさんに本のパンケーキのことを夢見るように話した。あきさんはちょっと考える風をして言った。

「今から作ってあげようか」

「日本でも出来るの？」

私は驚いた。

「もちろん！」

あきさんは、いそいそと台所に立ち、準備を始めた。ボウルの中に牛乳、卵、粉、砂糖を入れ、溶かしバターを流し込むと全部の材料を混ぜ合わせた。熱したフライパンに生地を流し、お玉で薄く伸ばしていく。バターの焦げる香ばしい匂いがたなびいた。あつという間に焼きあがったパンケーキをあきさんが皿に乗せた。ジェット機の速さで、「お話のパンケーキ」が目の前に登場し、私は静かに感動していた。

あきさんと向かい合ってパンケーキを食べた。しつとりとして淡い甘みの、初めてのおいしさだった。私はこのパンケーキは、きっと本物と同じに違いないと思った。

それから間もなくして、あきさんが重い病気で入院したことを母から聞いた。私はお見舞いに行きたい

上には赤いドレスのフランス人形が飾られ、背の高い本棚には本がぎっしりと詰め込まれてあった。本は好きだけれど、物語の本を数冊しか持たない私には、その本棚はとても魅力的だった。

あきさんは、舟木一夫の大ファンで、彼のブロマイドをオルゴール付きの宝石箱にしまってとても大切にしていた。歌と一緒に歌ったり、おしゃべりしたり、あきさんとの時間は、優雅で穏やかだった。

ある日、私はあきさんから一冊の本を借りた。本の題名は忘れてしまったが、ヨーロッパが舞台の外国文学だった。私と似た年の女の子が、街頭の屋台でおじさんが焼く薄いパンケーキを買う場面に強くひきつけられ、何度も読み返した。鉄板の上でパンケーキが焼けていく様子、匂いを想像し、生唾を飲み込んだ。食べたことのないお菓子から外国への憧れがどんどん膨らんでいった。

と言ったが、母は下を向いたまま首を横に振った。

あきさんのお葬式の日、割烹着をつけた長屋の奥さんたちが、お葬式の料理の仕度をしていた。学校が休みだったので、私も配膳などの仕事を手伝った。長屋のみんながきびきびと働いていることと、あきさんの死とを、私はどうしても結びつけることが出来なかった。

高校卒業後、専門学校で語学を学び、旅行添乗員になった私は、二十二歳の時、パリを訪れた。街のあちこちらで薄焼きパンケーキの屋台を見かけた。時代は違うが、もしかしたら本のなかの少女が食べたものと似た味がするのかもしれないと思った。でも、私は、それらを口にしたくはなかった。私の舌が覚えている、あきさんの「お話のパンケーキ」と本場のものとは比べたくはなかったからだ。

あの日のパンケーキの美味しさは、単なる食べ物味のではなく、あきさん自身を象徴するものとして、私のなかで生き続けている。